

サステナブルライフスタイル (2025 年 8 月)

2025 年, 家庭と社会のすがた

“サラリーマンの夏”

あらすじ :

太陽光発電と風力発電が電力需要の 15%を供給している。サマータイムが採用されて、明るい夕刻の余暇活動が活発になっている。自転車専用道が整備され、サラリーマンは自宅から最寄り駅まで自転車で往復している。IT 技術を応用した遠隔会議の普及で出張回数が減り、飛行機と新幹線のエネルギー消費量が少なくなっている。在宅勤務者が増えて、オフィスと通勤のエネルギー消費が減っている。オフィスはパーティションで仕切られた個人ブースになっており、不在時には人感センサーが照明や空調の電源をオフにしている。

夏休みは平均 2 週間

いよいよ夏本番の 8 月になり、青空に入道雲が湧き上がっている。学校は夏休みに入り、小中学生は宿題を片付けながら家族旅行や海水浴を楽しみに待っている。山川家も夏休みモードに入りかけており、護さんと美子さんは中旬からコペンハーゲンからイタリアまで列車の旅を計画している。列車の旅は外国人旅行者向けの割引チケットがあるので、少人数の自由な旅行に向いている。大学院に進んだ清子さんは、3 週間ほど八重山諸島に滞在する予定で来週には出発する。清子さんの話によると、最初の 1 週間は石垣島を拠点にスキューバダイビングを楽しみ、その後は西表島でキャンプしながら、カヌーを使ってマングローブの生態系を調査するらしい。一方、バイクの好きな豊さんは、友人と 2 人で北海道を 2 週間ほどツーリングする計画で、大き目のテントや寝袋を用意している。道央や道東は信号が少ないので、観光スポットに寄りながら 1 日に 200 キロぐらいは走れるだろう。護さんが勤める家電業界は、8 月は商品の動きが少なく暇な季節である。だから全工場の稼働を中旬から 10 日間停止して、その間は夏季休暇にする。ただし夏季休暇中に年に一度の大がかりな設備点検を行うので、保全関係者だけは交代で出勤する。他の社員も含めて、夏季休暇中も業務の都合で出勤した日数は、夏季休暇後に振り替え休日が認められる。製造業では 8 月中旬を夏季休暇にする会社が多いが、特別休暇ではなく国民の祝日の振り替えである。だから、一斉休暇というよりも一斉休業という方が正しい。従業員は一斉休業の前後に、土日や有給休暇を足して 2 週間程度を夏休みにする習慣が一般化している。海外にホームステイするとか、植林などのボランティア活動をする人は、さらに有給休暇を加えて 3 週間から 1 ヶ月を夏休みにすることもできる。

事務の簡素化が収益寄与

護さんは本来の営業活動が少ないのに忙しい日が続いている。2 週間の夏季休暇中は会社

と一切連絡を取らないつもりなので、事前に担当する顧客の注文に対処しておきたいからである。それと、後回しにしてきた販売実績の整理や、個人で立て替え払いしてきた経費の精算も済ませておきたい。護さんは手帳を取り出して、過去3ヵ月分の外出と出張の確認を始めた。護さんの外出は週に5回から多いと8回、出張は月に3回ぐらいなので、交通費の支出は3ヶ月で80件ぐらいになる。このうち会社に請求できるのは、タクシー代と出張時の遠距離交通費に宿泊費、それに航空機のチケット代だけである。このため明細書の作成は、20件ほどで済んだ。明細書をパソコンに入力して経理に送り、実費清算の領収書を提出すると、会社は登録してある銀行口座に立て替え金額を入金してくれる。立て替え払いと精算の期間は自由だが、1ヶ月単位で精算する人が多い。護さんが3ヶ月ごとの精算にしているのは不精な性格のせいで、少しぐらい立て替え払いの金額が大きくなって、まとめて処理する方が作業の手間が少ないからである。

ちなみに近場の電車賃やバス代は、自己負担が原則になっている。こうした細かい交通費は年間で20万円から多くても30万円程度で、年俸の数パーセント分に過ぎない。それに出張旅費やタクシー代と違って、毎月の変動が少ない。このため1件ずつ明細書を作って精算するのではなく、必要なら年俸で多少配慮するようになっている。通常の事務用品や用紙類は会社が常備しているが、常備品でない消耗品や書籍の購入も、一定金額以下は自己負担が原則である。接待費は多くの顧客を一度に招待するパーティーの費用が中心で、特定顧客へのセールスを目的とする接待はほとんどない。以前は接待費が会社の必要経費として認められ、課税控除の対象になっていた。だが2025年には必要経費に認められなくなっているので、過剰な接待も安易な接待もなくなっている。通勤交通費は社業と直接関係がない個人経費なので、全額自己負担である。このため会社に通勤ルートと通勤方法を届け出て、経理部門が定期代を確認して本人に支給するような生産性の低い業務はなくなっている。

以前はこうした細々した経費のすべてを会社が直接負担していたから、多様で大量の申請書、明細書、領収書などが必要だった。事務処理と決済の詳細な規定が作られ、管理者が必ず確認して承認印を押すようになっていた。このため管理者は定形的な事務処理に多くの時間を割かれ、事務スタッフの手間と経費も軽視できなくなっていた。オフィスコストまで含めた平均人件費は1人1分あたり50円を超えていたから、500円の経費支出に250円の事務処理経費がかかっていた笑えない話もある。それに個人の活動に要する経費は本人が負担する方が、無駄が少なく効率がよい。このため細々した経費は、個人の職業費という考え方が一般化したのである。もちろん、このような業務活動に必要な費用は、確定申告の段階で必要経費として認められる。年俸制が普及するとともに個人による税金の確定申告が一般化したため、事務の効率化が大幅に進んだのである。なお、私的な費用は全額自己負担になっており、社宅や保養所はすべて独立採算で運営されるか廃止されている。業務と関連性のない生活給や手当で類、たとえば家族手当、住宅手当、勤続手当、各種の補助金も廃止されているので、給与明細書は簡潔である。こうした事務と処遇体系の簡素化で、総務部門と経理部門を中心とする事務量と経費が2010年頃より3割も少なくなり、削減された経費は先行投資と業績報酬に向けられている。

オフィスは省エネ・省資源

経費の処理を終えた護さんは、次に流通センターの在庫が十分かどうか確認しておくことにした。でもその前にトイレに行って喫茶コーナーに寄り、仲間と少し雑談して気分を転換したい。護さんが執務室から出て歩き始めると、普段は壁際の間接照明しかない通路の天井照明が点灯した。人感センサーが人の通るのを検知して天井照明を点灯し、人が途絶えれば元の間接照明に戻るようになっているのである。このため長い通路を歩くと、天井照明がまるで人の前を行くように次々に点灯し、数分後には次々に消灯する。トイレにも人感センサーがついていて、人が近づくと点灯し不在になると数分で消える。トイレの洗浄用水には、ほとんどのオフィスビルが地下に蓄えた雨水を使っている。トイレは温水洗浄ノズルと乾燥用空気のノズルがついたシャワートイレだから、トイレットペーパーの使用量が少ない。統計データによると、在来型のトイレなら1人1日あたり6メートルのトイレットペーパーを使うが、シャワートイレだと約2メートルと3分の1になる。毎日のことなので、シャワートイレの紙資源節減効果は大きく、経費の節減にも寄与している。

家庭では4人家族の家にシャワートイレを設置すると、電気代が便座保温用に1年で2,400円、洗浄温水用に1,000円、乾燥温風用に590円と、約4,000円必要である。一方、1年に12,000円必要だったトイレットペーパー代が3分の1の4,000円に減るので、差し引き4,000円の経費を節減できる。この試算はトイレの使用頻度や使用時間を在宅基準で計算しているのだから、在宅時間が短いと経費節減効果も少し小さくなる。外国人はシャワートイレを日本人の発明したハイテクトイレと呼んでおり、国内では2005年に約40%の普及率だったが、2025年には100%に達している。シャワートイレの快適性と紙資源節減効果は、海外でも評価が高い。このため、中国やアジア諸国でも現地生産が拡大し、普及率が50%を超えている。なお、オフィスのトイレには強風乾燥機があり、手を差し込めば水滴を吹き飛ばしてぬれた手を乾かす。だからペーパータオルはもう使われていない。

相乗りタクシーで帰宅

護さんが喫茶コーナーに寄ると、カザフスタンに販売拠点を設置する目的で、3ヶ月も出張していた笠井さんが戻って来ていた。さっそく断片的な様子を聞いたがもっと詳しく聞きたくなったので、仕事が終わったらチームメンバーと一緒に続きを聞かせてもらうことにした。護さんは仕事を終わると笠井さんを近所のビアレストランに誘い、今度はビールを飲みながら現地の人々の暮らしや食べ物、それに習慣などを聞かせてもらった。笠井さんは羊のチーズの匂いが苦手で困ったり、「女性の日」に気がつかないで花束のプレゼントを忘れていたそうである。中央アジアには5月に「女性の日」というのがあり、職場でも家庭でも、男性が女性に花を贈る習慣があることを護さんは初めて知った。知らない国の珍しい話を聞くのは楽しいので時間の流れが早い。気がついたらいつものまにか8時を過ぎていたので散会し、電車に乗って自宅の最寄り駅に着いた。

改札を出ると雨が降っているので、自転車は駐輪場に置いたままバスで帰ることにした。でもバス停を見ると長蛇の列ができており、30分ぐらいは待たされそうである。護さんと同じような自転車通勤者が多いからだが、アルコールの残っている護さんには30分のバス待ちはいささか辛い。そこでタクシーで帰ることにして並んで待っていたら、前の方から護さんが住む「～地区の方いませんか」と呼ぶ運転手の声が聞こえる。さっそく前に行き、他の2人の客と同乗させてもらったおかげでほとんど待たずに済んだ。タクシーの運転手は目的の地区に入ると、1人ずつ降りる場所を確かめて停車し、客はそれぞれ料金を払って降りていった。タクシーは相乗りのルールが確立しており、1人客を基準に1人増えると0.3人分ぐらい高くなるので、相乗りはタクシー会社や運転手にとっても有利なのである。一方、お客にとっても待ち時間が少なく料金は割安になる。乗車効率が高くなるので、燃料消費量もタクシーの台数も少なくて済む。

相乗りができるようになる前はタクシー待ちの列が長く、週末の深夜は運が悪いと1時間ぐらい待たされていた。雨の夜は薄暗い光の下に傘の列が長く伸び、ときどき吹く横なぐりの雨がコートや裾をぬらしていた。傘のしずくが足元を濡らすので、冬はときどき足踏みして足先の冷たさを紛らせていた。沈黙の列はタクシーが来るたびに1人分だけ前に進み、またしばらく止まる。一刻も早く帰りたい客は、ときどき無意味に腕時計を見ながら自分の番をひたすら待ち続けていた。だが2025年にはこうした光景は姿を消している。タクシーの相乗りは、責任問題が複雑になるという理由で規制していた行政官庁があったが、規制緩和と保険制度の整備で2025年には解決されているのである。



(イラスト：海老原ケイ)